

宇都宮市創造都市研究センターの 地域活性化研究プロジェクト班について

A Report on the Regional Revitalization Research Project Group
of the Research Center for Creative City Utsunomiya

吉 田 肇 (宇都宮共和大学 教授)

宇都宮市創造都市研究センターでは、“文化のかおるまちづくり”を具体化するための研究および事業の企画・運営を行う組織として、「地域活性化研究プロジェクト班」を結成し、意見交換を重ねてきた。2019年度においては、3大学学生有志による「創造都市研究ゼミ」（3グループ）を結成し、宇都宮市の現状や課題を把握するとともに、クリエイター等のアドバイスを受けながら、創造都市化に向けたアイデアを出し合い、「第16回学生&企業研究発表会」（主催：大学コンソーシアムとちぎ）や「大学生によるまちづくり提案2019」（主催：うつのみや市政研究センター）等の場で、研究成果の発表と政策提言を行った。

キーワード：創造都市，地域活性化，シビックプライド，景観，起業

はじめに

宇都宮市創造都市研究センターは、宇都宮市内の私立4大学（宇都宮共和大学、作新学院大学、文星芸術大学、帝京大学宇都宮キャンパス）と自治体・産業界等が連携し、宇都宮都市圏の創造都市による発展を目指し、2017年10月に設立されたプラットフォームである（センター長：宇都宮共和大学長 須賀英之）。本事業は、文部科学省の「私立大学総合改革支援事業（タイプ3関連事業）」に選定されている。

1.1 活動の背景と経緯

1.1.1 地域活性化研究プロジェクト班の概要

宇都宮市創造都市研究センターの事業のうち、“文化のかおるまちづくり”を具体化するための研究および事業の企画・運営を行う独立組織として、地域活性化研究プロジェクト班（班長：宇都宮共和大学都市経済研究センター運営委員）を結成し、意見交換を重ねている。

地域活性化研究プロジェクト班の参加メンバー

①宇都宮共和大学，②作新学院大学，③文星芸術大学，④帝京大学宇都宮キャンパス，⑤宇都宮市，⑥宇都宮商工会議所，⑦宇都宮オリオン通り商店街振興組合，⑧ NPO 法人宇都宮まちづくり推進機構，⑨トヨタウッドユーホーム株式会社，⑩ NPO 法人とちぎユースサポーターズネットワーク——を基本とし，市内外の事業者や芸術家，市民（リコージャパン株式会社栃木支社，大谷石材協同組合事務局長，一般社団法人スリーアクト，脚本家，デザイナー等）もメンバーに加わっている。

1.1.2 創造都市研究ゼミによる活動

宇都宮市創造都市研究センター地域活性化研究プロジェクト班では，宇都宮都市圏の創造都市化に向けた取り組みの一つとして，3大学（宇都宮共和大学，作新学院大学，文星芸術大学）のまちづくりに関心の高い学生12名（各大学4名）を招集し，3つの「創造都市研究ゼミ」（シビックプライド研究グループ，景観研究グループ，企業研究グループ各4名）を創設した。

創造都市研究ゼミでは，約1年をかけ，ゼミ生たち自らが地域に足を運び，宇都宮市の現状や課題を把握するとともに，創造都市化に向けたアイデアを出し合い，行政や民間企業にその方策について提言を行った。

1.2 活動の経緯

(1) 第1回地域活性化研究プロジェクト班意見交換会

- ・日 時：2017年11月29日（水）10：30～12：30
- ・会 場：宇都宮まちづくり交流センター イエローフィッシュ
- ・主な内容：創造都市研究センターとして目指すところについて意見交換。各団体で実施している地域活性化等の事例を洗い出し。

(2) 第2回地域活性化研究プロジェクト班意見交換会

- ・日 時：2017年12月22日（金）15：30～16：30
- ・会 場：宇都宮まちづくり交流センター イエローフィッシュ
- ・主な内容：創造都市研究センターのスキーム案について意見交換。各団体で実施している地域活性化等の事例を洗い出し。

(3) 第3回地域活性化研究プロジェクト班意見交換会

- ・日 時：2018年2月22日（木）10：00～12：30
- ・会 場：宇都宮まちづくり交流センター イエローフィッシュ
- ・主な内容：各団体で実施している地域活性化等の事例について協議し，アーティスト・タレント等が住んでみたくなるまち「創造都市・宇都宮市」を形成していくことで認識が一致。

(4) 第4回地域活性化研究プロジェクト班意見交換会

- 日 時：2018年4月27日（金）10：00～12：00
- 会 場：宇都宮まちづくり交流センター イエローフィッシュ
- 主な内容：創造都市の実現に向けたクリエイターによるアイデア提案

提案①：「映画で愉快だ、うつのみや—映画による文化創生都市作りのご提案—」

鈴木 智 氏（脚本家）

提案②：「宇都宮市創造都市研究センターの強みと組織体制のご提案」

浅野 裕子 氏（一般社団法人スリーアクト 代表理事）

提案③：「まちづくりとデザイン」

坂内 雄二 氏（RICE 株式会社 代表取締役社長）

コーディネーター

鈴木 智 氏（有限会社メイユウ経営研究所 取締役・副社長）

(5) 第5回地域活性化研究プロジェクト班意見交換会

- 日 時：2018年9月14日（金）10：00～12：00
- 会 場：宇都宮まちづくり交流センター イエローフィッシュ
- 主な内容：「創造都市の実現に向けたクリエイターによるアイデア提案」の振り返り

(6) 第6回地域活性化研究プロジェクト班意見交換会

- 日 時：2019年4月5日（金）15：30～20：00
- 会 場：宇都宮まちづくり交流センター イエローフィッシュ
- 主な内容：「創造都市研究ゼミによるまちづくり提案にむけた研究計画発表」
 - 提案①：「郷土愛強化のための栃木ブランドを活かしたチャレンジショップ村の開設」
 - 提案②：「景観改善のための大谷石の活用」
 - 提案③：「外国人が起業しやすい環境の整備『UTSUNOMIYA VALLEY 計画』」

(7) 地域活性化研究プロジェクト班報告会

- 日 時：2020年2月27日（木）15：00～17：00
- 会 場：宇都宮まちづくり交流センター イエローフィッシュ
- 主な内容：「創造都市研究ゼミによるまちづくり提案」
 - 提案①：「宇都宮市民50万人観光大使計画 —市民が宇都宮をもっと自慢するために—」
 - 提案②：「宇都宮駅西口大改造計画 —目でみてわかる宇都宮—」
 - 提案③：「起業したくなるSDGsな未来都市うつのみや「UTSUNOMIYA VALLEY 計画」」

2 主な活動内容

2.1 創造都市研究ゼミの活動

2019年度においては、地域活性化研究プロジェクト班内に創設した、3大学学生有志で構成された「創造都市研究ゼミ」によるまちづくり提案活動を中心に取り組み、研究成果の発表やまちづくり提案などを行った。具体的な活動経緯は、以下の通りである。

- ・2019年2月22日：イエローフィッシュにおいて開校式、創造都市研究ゼミが始動（指導教官：宇都宮共和大学 西山弘泰専任講師，作新学院大学 春日正男特任教授）
- ・2019年3月6～8日，市内の現地視察，ディスカッションを行い，3グループ（シビックプライド研究グループ，景観研究グループ，起業研究グループ）に分かれて予備調査開始

- ・2019年4月5日：地域活性化研究プロジェクト班意見交換会において，2019年度の調査計画を発表。地域活性化研究プロジェクト班のメンバーからアドバイスや支援を取得。
- ・2019年4月以降は，テーマごとに調査開始
 - ※研究グループごとに個別に活動，月1回程度全体で集まり情報共有，ディスカッション
- ・2019年6月2日：日本建築家協会栃木地域会主催「旧日光庁舎周辺整備基本計画ワークショップ」への参加
- ・2019年6月7日：「創造都市宇都宮都市圏を考えるシンポジウム—産官学連携による創造都市を目指した“特色ある地域づくり”」（於 宇都宮共和大学）で各研究グループによる研究発表
- ・2019年8月22・29日：夏季集中ゼミを実施し，各研究グループによる調査，資料収集，ディスカッションを実施
- ・2019年11月10～11日：金沢への視察調査（金沢市役所への取材，金沢学生のまち市民交流館，金沢市街地等の視察など）。宇都宮共和大学 西山弘泰専任講師，作新学院大学 春日正男特任教授，ゼミ生12名が参加。
- ・2019年11月17日，起業研究グループの企画主催で学生向けの起業啓発イベント「『起業』という選択肢を考えてみよう」（於 イエローフィッシュ）を実施。
- ・2019年11月30日：コンソーシアムとちぎ主催「第16回学生&企業研究発表会」（於 作新学院大学）の研究発表で3ゼミとも企業冠賞を受賞。
- ・2019年12月11日，「JR宇都宮駅西口地区の再開発・再整備を考える意見交換会」（於 イエローフィッシュ）において，景観研究グループが学生提案「宇都宮駅西口大改造計画一目でみてわかる宇都宮一」を発表。
- ・2019年12月20日：うつのみや市政研究センター主催「大学生によるまちづくり提案2019」（於 宇都宮市役所）で景観研究グループ「宇都宮駅西口大改造計画 一目でみてわかる宇都宮一」が第3位に入賞。

- ・2020年1月14日：景観研究グループメンバー（作新学院大学 猿山，宇都宮共和大学 遠藤）が

ミヤラジに出演し、放送された。

・2020年1月21日：景観研究グループメンバーが宇都宮市長と対談

・2020年2月27日：地域活性化研究プロジェクト班報告会において、3つの研究グループが成果報告。プロジェクト班メンバーと意見交換

2.2 創造都市研究ゼミの研究成果

地域活性化研究プロジェクト班意見交換会のなかで、宇都宮都市圏の創造都市化を図るための方向性として、市民とのまちづくり意識の共有、創造都市を感じさせるまちづくり¹⁾、クリエイティブ産業を始めとする起業の活性化²⁾などの方向性が抽出された。そこで、地域活性化研究プロジェクト班内に創設した、3大学学生有志で構成された3つの「創造都市研究ゼミ」（各4名）では、それぞれシビックプライド研究グループ、景観研究グループ、起業研究グループとして研究を進めていくこととなった。

2019年度においては、「創造都市研究ゼミ」3グループによるまちづくり提案活動を中心に取り組み、研究成果の発表を行った。

(1) 「第16回学生&企業研究発表会」における研究発表

2019年11月30日、大学コンソーシアムとちぎが主催する「第16回学生&企業研究発表会」（於作新学院大学）で3つの創造都市研究ゼミ（景観研究グループ、シビックプライド研究グループ、起業研究グループ）が、以下のテーマで研究発表を行った。

このうち、景観研究グループが「大高商事賞」を、シビックプライド研究グループが「株式会社ファーマーズ・フォレスト賞」、起業研究グループが「栃木銀行賞」をそれぞれ受賞した。

① 「JR 宇都宮駅西口再開発構想 ～栃木県を象徴する駅前景観の創造を目指して～」

プラットフォーム共同研究プロジェクト 景観研究グループ

② 「宇都宮市民 50 万人観光大使計画 ～市民が宇都宮をもっと自慢するために～」

プラットフォーム共同研究プロジェクト シビックプライド研究グループ

③ 「UTSUNOMIYA VALLEY 計画 ～起業促進策の検討と実践をとおして～」

プラットフォーム共同研究プロジェクト 起業研究グループ

(2) 「大学生によるまちづくり提案 2019」における研究発表

2019年12月20日、うつのみや市政研究センターが主催する「大学生によるまちづくり提案 2019」（於宇都宮市役所 14 大会議室）で3つの創造都市研究ゼミ（シビックプライド研究グループ、景観研究グループ、起業研究グループ）が、以下のテーマで研究発表を行った。

このうち、景観研究グループが第3位に入賞、シビックプライド研究グループと起業研究グループ

プは奨励賞を受賞した。また、景観研究グループは、2020年1月21日に宇都宮市長との意見交換会を行った。

①「宇都宮市民50万人観光大使計画 ―市民が宇都宮をもっと自慢するために―」

プラットフォーム共同研究プロジェクト シビックプライド研究グループ

②「宇都宮駅西口大改造計画 一目でみてわかる宇都宮―」

プラットフォーム共同研究プロジェクト 景観研究グループ

③「起業したくなるSDGsな未来都市うつのみや 「UTSUNOMIYA VALLEY 計画」」

プラットフォーム共同研究プロジェクト 起業研究グループ

ここでは、「大学生によるまちづくり提案2019」において、3グループそれぞれがまちづくり提案を行った提案書を示す。(表-1, 表-2及び表-3)

(出所：宇都宮市ウェブサイト「大学生によるまちづくり提案発表会2019」

<https://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/shisei/machi/kenkyu/renkei/1022243.html>, 2020/3/31
アクセス)

表-1 学生提案成果報告 (シビックプライド研究グループ)

No.1	提案名：宇都宮市民 50 万人観光大使計画 —市民が宇都宮をもっと自慢するために—
	提案団体名：プラトホーム共同研究プロジェクト シビックプライド研究グループ
	所属：宇都宮共学術学部／作新学院大学経営学部／文星芸術大学美術学部
	代表者：車塚 穂乃香 指導教員：西山弘泰、春日正男
チームメンバー	車塚 穂乃香 (文星芸術大学 3 年)、馬 宇彤 (宇都宮共学術大学 2 年)、野中相佳 (作新学院大学 3 年)、木村 天 (宇都宮共学術大学 2 年)

○ 提案の要旨 (Abstract)

本提案は、宇都宮市民すべてがシビックプライドを持ち、宇都宮市を自慢できる都市にすることを目的とする。市民の宇都宮への愛着は全国的にみても高い。ところがその理由をみてみると、「生活利便性の高さ」や「自然災害の少なさ」「東京へのアクセス」など、日常生活に根差したものが多く、それが宇都宮市への誇りや他地域居住者への自慢にはつながらないと思われる。その証左として、栃木県は 2019 年もブランドカレッジでは 43 位と下位に甘んじている。また、宇都宮市においても「餃子」以外のイメージや観光資源に乏しく、地元には存在となつていない。本提案者は、宇都宮市のブランド力向上や認知度向上、観光振興、さらには産業振興には、シビックプライドの向上が最も重要であると仮定した。宇都宮市では、ブランド推進協議会を立ち上げるなど、官民協働のシニアプロジェクトを展開している。例えば宇都宮市民向けのアンケートは「宮カフェ」や「愉快ログ」などは斬新な取り組みといえよう。一方、学校教育においては小中学校で「宇都宮学」を必修とし、子どもたちの郷土を愛する心を育む事業も来年度以降順次実施される。

以上のように、宇都宮市では市民に向けたシニアプロジェクト、郷土教育の体制が確立されつつある。ところが、提案者たちのような高校生から大学生までの学生には、宇都宮の良さを知る機会がほとんどない。そこで提案者たちは、高校生と大学生が地域をまちづくりに主体的に関わる組織、それが活動拠点とする建物の整備を提案する。具体的な提案は以下となつている。

- **【活動拠点の整備】**どの地域の高校生でも集まりやすい中心市街地に学生の活動拠点を設置する。拠点は宇都宮の歴史や文化を感じられる場所ということから、オリオン通り近くに立地するまちづくり交流センター「イノベーション」が最適である。
- **【学生まちづくり団体の設立】**学生のまちづくり団体を設立する。その名称は「宇都宮若者まちづくり機構」である。対象年齢は高校 1 年生から大学 4 年生までで、高校 1 年生、大学 1 年生時にそれぞれ募集を行う。
- **【人的サポート体制の確立】**市の専属職員を 1 名つけ、団体のサポート、施設の管理を行う（担当部署はみんなでもまちづくり課か市政研究センターが妥当）。また、嘱託のアドバイザーを数名配置し、細かなサポートや地域住民・組織、企業との仲介を行う。
- **【学生団体の事業】**学生団体は、いくつかのプロジェクトに分かれ、さまざまなまちづくり活動に主体的に関わりつついく。例えば、商店街と連携しホームページを作成したり、マップを制作したりする。また、高齢者の見守り活動など地域課題にも取り組む。事業による効果として、学生たちがまちづくり活動を通して出会う市民や事業者との信頼関係によって宇都宮への関心と真の郷土愛が醸成される。また市が保有する施設を有効活用できる。さらに、郷土愛を持つ学生を増やすことによる優秀な若者の県外流出阻止できる。このように地域に愛着を持ち、将来宇都宮のまちづくりを担うリーダーを高校生から養成する。彼らが宇都宮の本当の良さを知り、それを他の市民、県外居住者に発信することで、やがて宇都宮市民全員が宇都宮を愛し、市民であることにプライドを持った観光大使になつていくのである。

1. 提案の背景・目的

創造都市研究ゼミは 2019 年 2 月に、宇都宮共学術大学、作新学院大学、文星芸術大学の学生各 4 名、計 12 名が集まり、結成された 3 大学連携ゼミである。2 月に集中ゼミを実施し、「創造都市とは何か」を議論した。また、市内中心部のまち歩きを実施し、宇都宮の現状や課題の把握を行った。議論やまち歩きを通して導き出された宇都宮の課題は「宇都宮の人は宇都宮に誇りを持っていない」という点であった。メンバーは、全員市外、県外出身者である。確かに宇都宮出身の人に「宇都宮って何が市の？」と尋ねると、決まって「餃子以外なものもない」という回答が帰ってくる。宇都宮が市に比べ印象が薄かったり、ブランド力が低かったりするのは、市民自身が宇都宮を誇りに捉えて、自慢しないからではないか。創造的な都市を目指すためには、その都市特有の「個性」が重要なキーワードになってくる。その「個性」を出すためには、その都市の歴史や文化から裏打ちされた「都市への誇り」、すなわちシビックプライドが重要であると結論付けたのである。

以上のように、宇都宮市を創造都市として発展させていくためには、市民が宇都宮の歴史、文化を土台にした都市の魅力を深く理解し、それを守り、発展させようとする意志と行動が必要である。そこで私たちは、宇都宮市民すべてがシビックプライドを持ち、宇都宮市を自慢できる都市にすることを目的とした。

2. 提案の目標・SDGs との関係

本提案は、間接的に SDGs における 17 の指標すべてを包含しているものと考えられる。本提案は市民の都市への関心を高めることを第一の目的に掲げている。学生たちが地域に出れば、人との関わりを通して都市のさまざまな課題を目の当たりにすることになる。こうした課題発見が 17 の各指標に取り組む原点となる。

直接的な SDGs との関係としては、「4. 質の高い教育をみんなに」や「9. 産業と技術革新の基盤をつくろう」、「11. 住み続けられるまちづくりを」が該当すると思われる。本提案が実現させることで、高校生や大学生に対して、学校だけでは学べない地域という生きた教科書を提供することができる。その教科書は、すなわちまちづくり活動を通して出会う人であるが、それらの人々からは地域の歴史や文化のみならず、生き様や仕事、価値観など「生きるすべ」や「生き方」を教わることができる。また、「9. 産業と技術革新の基盤をつくろう」に関しては、若者が中心市街地に集い、さまざまな人々と交わることにより、新たなアイデアや気運が醸成される。まちづくり活動に関わった学生同士が起業し、地域課題の解決につながる可能性がある。こうした学生たちが誰かとなつてつながることこそが、技術革新の基盤となる。

3. 現状分析

本章では、まず宇都宮市民の愛着度や市外居住者からの評価についての、具体的なデータを提示しながら、その現状を把握する。また、シビックプライドや郷土愛の向上に向けた宇都宮市の取り組みについてまとめる。

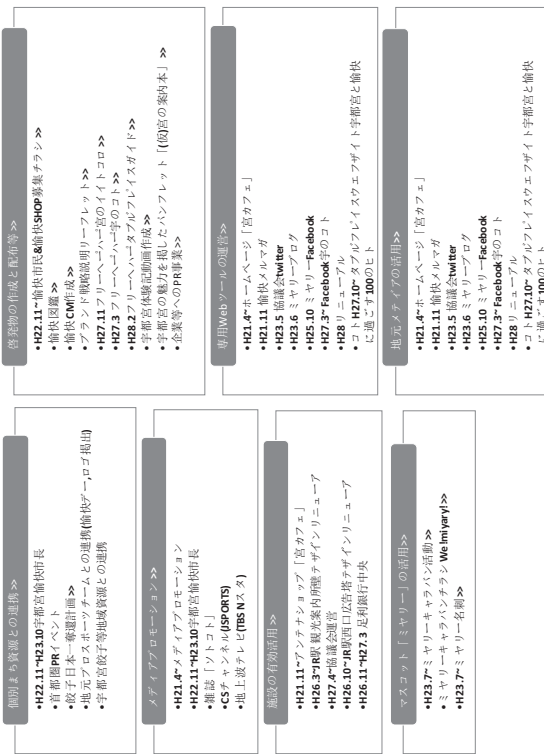
3.1 宇都宮市民の宇都宮に対する愛着度

そもそも宇都宮市民の愛着度は低いのだろうか。宇都宮市と同様に中核市である仙台市や長崎市、金沢市、姫路市などの愛着度を各都市の市民意識調査をもとにデータを収集してみた（図表 1）。宇都宮市の「とても愛着を感じている」、「どちらかといえば愛着を感じている」の割合が合わせて 90% を超えているのに対し、仙台市や長崎市の割合は 80% 台であり、他の中核市と比較しても、宇都宮市の愛着度は実はとても高かったことがわかる。宇都宮市民は決して宇都宮に対して愛着をもっていないわけではない。これは意外な結果であった。宇都宮市民の愛着度を時系列

3.3 宇都宮市の取り組み

本節では、宇都宮市民のシビックプライド向上に向けた宇都宮市の施策について「シティブロモーション事業」と「郷土教育」の2つの観点でその概要を示す。

(1) 宇都宮市におけるブランド推進の取り組み
 宇都宮市では、「宇都宮ブランド」100年先も誇れるまちを、みんなで〜を合言葉に、行政と市民、企業が一体となって宇都宮の魅力を考え、発見し、形作り、発信することを目指している(宇都宮市HPの一部を引用)。それを担うのが、行政・経済・まちづくり団体、交通事業者、学識経験者、公募市民らなる「宇都宮ブランド推進協議会」である。当協議会では、上記の合言葉を実現するために、委員がアイデアを出し合い、会が発足した2009年度よりさまざまな施策を提案、推進してきた。それを図表4に示している。以下では、それらの事業の中でも、2つの事業を紹介する。

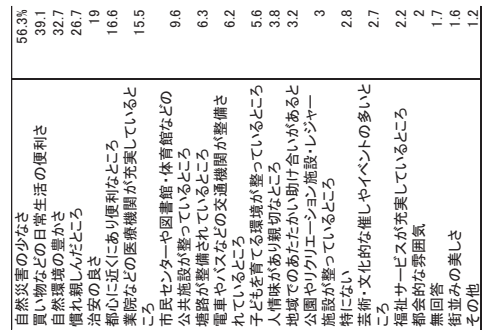


図表4 宇都宮市ブランド戦略取り組み(平成20年度～28年度)
 資料:平成28年度宇都宮ブランド戦略事業報告書より作成

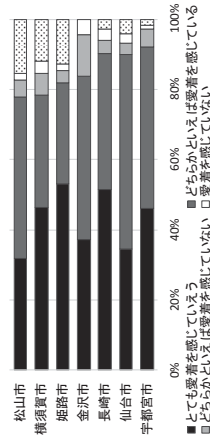


写真1 宮カフェの外観(左)と1階の様子
 資料:2019年9月提案者ら撮影

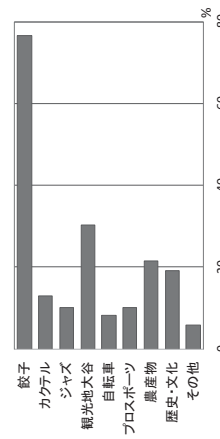
図表2 宇都宮市を好きになる理由



資料:第51回「市政に関する世論調査」より作成



図表1 他都市との愛着度の比較
 資料:各都市2018年市民意識調査より作成



図表3 宇都宮市で観光に興味のあるもの
 資料:平成30年宇都宮市観光動向調査より作成

でみると、2013年までは他都市と同様に90%を切っていた愛着度が、2013年以降90%を越え、その数値を維持している。これは、後述する宇都宮市のシティブロモーション事業等の効果であると推察できる。

それでは市民は宇都宮のどこに愛着を持っているのか。宇都宮市の世論調査によると宇都宮を好きな理由として日常生活の利便性や災害の少なさ、自然環境の良さが上位にあげられている(図表2)。しかし、こうしたいわば、「住みやすさ」は「宇都宮に住んでいて幸せだ」という感覚は生むものの、日常にあふれているものなので、それを他市の人々にうまく伝えることが出来ない。つまり、「住みやすさ」は市外の人に自慢しづらい、もしくはどのように自慢すればいいかわからず、結果として「餃子以外なもの」という回答になってしまうと思われる。

一方で、栃木県のブランド力はどうか。ブランド総合研究所が毎年調査している全国3万人を対象に各地域のブランド力を評価する「地域ブランド調査」では、栃木県の魅力度(ブランド力)は43位であり全国的に見ても低い。以上のことから宇都宮市は高い愛着度があるにも関わらず、ブランド力は低いということがわかる。これは大変もったいないことであるが、今後宇都宮市のブランド力を向上させる下地を十分有しているということもなる。

3.2 市外居住者から見た宇都宮の観光資源

宇都宮市外の人、宇都宮での観光資源に興味があるものとして「餃子」が約80%と最も多い(図表3)。しかし、それ以外のものは全体的に低く、宇都宮の観光資源は餃子だけだと思われている。宇都宮には観光地大谷やジャズ、カクテルなど素晴らしい観光資源が多くあるにも関わらず、それらに興味を持ってもらえていないことがわかる。宇都宮市では宇都宮の観光資源として「ジャズ」や「カクテル」をPRしているが、それが上位にあがっていないのが残念である。

住んでいる地域について学ぶ機会が極端に減少するのが現状である。確かに、栃木県では県立高校において、総合的な学習等の時間に地域調査に取り組んでいる。しかし、多くの高校では受験対応や人的な課題から、郷土について学ぶ機会がない。そこで提案者らは、11月10日から11日にかけて先進地視察のため訪れた金沢市の取り組みを参考に、高校生から大学生がまちづくり活動を通して、地域と関わり、郷土愛やシンポジウムを育む取り組みを提案したい。

4. 施策事業の提案

4.1 金沢市の「学生のまち・金沢の推進」の取り組み

(1) 金沢視察について

まず、提案者らは他市の取り組みを参考にすべく、宇都宮市と同じく中核市であり、国際観光都市、歴史・文化が息づく都市、歴史や文化に根差した創造的な都市の金沢市に11月10日から11日にかけて視察を行った。まず10日午前中は歴史的なまちが残る長町周辺をボランティアガイドの方にご案内いただいた。午後(12時から18時)は私たちの視察先である「金沢学生のまち市民交流館」へのヒアリング(管理・運営を行う金沢市市民参画職員1名)、金沢まちづくり学生会議(学生まちづくり団体)の学生との意見交換、金沢学生のまち市民交流館が開催するイベント(カノウセイフェス)の見学と交流会への参加、そして学生たちをサポートするコーディネート2名へのヒアリングを実施した(図表5)。以下では、まず「学生のまち金沢」とは何かを概説する。

(2) “学都” 金沢の誕生と現状

金沢は、明治19年～20年(1886から1887年)に、全国五学区の各学区において官立の高等中学(金沢は第四高等中学校)が設置された5都市のうちの一つである。その後、金沢市及び近郊には、次々と高等教育機関が開学し、県外からも多く学生が来ることで「学生のまち」として発展してきた(金沢市市民局市民協働推進課提供資料より)。1970年代に大学が郊外に移転しはじめたことにより、まちもなかに学生が集まらなくなりました。しかしながら2017年のデータでは、石川県は人口1,000人当たりの学生数が全国5位、人口10万人当たりの高等教育機関数では全国1位と学都としての地位は健在である。

(3) 「金沢市における学生のまちの推進に関する条例」の制定

大学の郊外移転、学生の居住様式の変化(下宿からアパート・マンションへ)、アルバイトや余暇の過ごし方の変化などを背景に、学生の地域住民との関わりが減っていった。また、郊外化で学生たちは中心部に向かい遊びなくなり、学生と市民が日常生活の中で親しく交わり、学習の場としてまちに溶け込み、生き活きと学が姿が薄まったことに、当時の市長である川田保氏が危機感を持った。そうした中で、学生がまちになかまに集い、市民との交流の中で、まちなかを学び舎とし、かつたの活気あふれる学都金沢を実現するための条例「金沢市における学生のまちの推進に関する条例」が2010年4月に施行された。当条例は、学生と市民、学生とまちとの関わりを深めることを目的としており、無論現在においても全国でただ一つの条例である。当条例の第1条では条例の目的として次のことが書かれている。「地域社会が可能性豊かな学生を育み、学生と市民との相互の交流や学生と金沢のまちとの関係を深めながら、学生のまちとしての金沢の個性と魅力をさらに磨き高めていく」。

上記の目的からは、学生とまち・市民の交流の中から、都市の魅力や活力、創造的なアイデア等が生まれ、都市を発展させていくという内容を垣間見ることができている。また、将来の都市を担っていく若者をまちぐるみで育てていくという意思を感じ取ることができる。若者を育て活躍してもらうことが、都市の繁栄につながるという信念に基づく条例である。当条例は、5章構成、21条からなっている。当条例は、学生が地域コミュニティや企業と関わるための各種施策を講じよう定めているところに特徴がある。次に当条例により金沢市が実施している学生のまち金沢を目指した取り組みを紹介する。

まず「愉快ロゴ」は「○○愉快だ宇都宮」という9文字で宇都宮の良さを発信しようとする取り組みで、2019年7月で1000パターン以上の申請があった。これは宇都宮の良さを市民が発見し、市内外に発信する良いツールである。例えば、企業や各種団体が看板にロゴを掲げたり、自動車の後方に貼り付けたりするなど、市民にかかわらず浸透している印象を受ける。宇都宮のさまざまな団体名や資源が文字になり、それが市民や来訪者の目に触れることができるのがユニークな点である。

次に今年で開設10年目を迎える「宮カフェ」である。宮カフェ宇都宮市中心部オリオ通りに店舗を構え、市民に対して宇都宮の特産品や情報の発信を行っている。宮カフェの1階は市内農産物や六次産業商品、大谷石グッズなど、宇都宮に縁のある商品が販売されている。また、宮カフェは「宇都宮のアンテナショップ」を標榜しており、餃子やカクテル、ジャズ等の様々なパレットやイベント情報の発信も行っている。2階は現在イタリアンレストランが入居し、市内の食や文化を楽しむことができる。この宮カフェは、宇都宮市中心部のオリオ通りにあり、コンセプトは宇都宮市民に宇都宮の魅力を知ってもらうというものである。提案者たちは9月にこの宮カフェにお邪魔し、店長の小野さんについてお話を伺った。宮カフェは、商店街の空き店舗を市が借り受け、民間事業者によって指定管理で運営されており、現在3つの事業者が共同運営を行っている。1階は「るまんちく村」を運営するフアーマーズフオレストが運営し、宇都宮の魅力発信できるよう工夫されている。イベント時には多くの来場者が訪れるオリオオンスクエア向かい側という好立地でもあり、宇都宮の観光資源のPRに効果があるものと考えられる。ところが来店客を見ると、中高年の方が多い印象を受けた。小野さんのお話でも、客層は中高年が中心のようである。以上のように宮カフェは、「宇都宮市民に向けたアンテナショップ」という点で、斬新な取り組みと言え、運営会社とのユニークな取り組み、情報発信等により効果があるといえる。とはいえ、客層を見ると中高年が中心で、若者へは至っていないと考えられる。

(2) 郷土愛を育む「宇都宮学」の取り組み





都市への愛着や誇りは、一朝一夕に意識されるものではない。その都市の成り立ちや地域の文化や歴史、先人たちが築き守ってきたものなど、総合的に学ぶことにより徐々に培われていく。都市への愛着や誇りの基礎となるのが小学校や中学校における郷土教育である。本提案の目的である宇都宮市民のシビックプライドの向上には欠かせない取り組みであることから、2019年11月19日11時より学校教育課職員の方3名に対し、宇都宮市における郷土教育について1時間程度お話を伺った。

宇都宮市では、「第2次宇都宮市教育推進計画」において「グローバル社会や情報社会などに対応できる力の育成」を掲げ、郷土教育の充実を図ろうとしている。その中で「郷土・宇都宮への誇りと愛着を育む『宇都宮学』」を提唱し、それを小学校3年生から中学校3年生まで副読本を用いて(副読本の使用は小学校5年生から)学ぶ事業を2020年度から開始する。2020年度から小学校において、2021年から中学校において授業が開始される予定となっている。

ヒアリング時に配布された「郷土を育む『宇都宮学』(概要版)」によると、宇都宮学は、小学校3～4年次において身の回りの生活を支えている施設や宇都宮の観光資源や歴史資源である大谷資料館、大谷寺などの見学を通して「宇都宮のよさに気づき、親しむことができる」ということを目標としている。小学校5～6年次には副読本(小学校版)を使用し、宇都宮の地勢や自然環境、交通、伝統文化などを総合的に学習することで「宇都宮のよさを理解」する態度を身に付ける。中学校の3年間においては、小学校同様、副読本(中学校版)を用いて、宇都宮の歴史→観光資源(日本遺産大谷石の文化)→産業やLRT・ネットワーク型コンパクトシティというように、宇都宮の持つ独自性や強みを学び、それを将来のためにどう生かすのか、また将来のために自分たちは何をすればよいかなど、「宇都宮の未来を考えたり、魅力を表現したりできる」ようになることを目的としている。

以上のように、宇都宮市では小学生と中学生に対し、継続した郷土教育を行うことで、子どもたちの郷土に対する誇りや愛着を育もうと取り組みを行っている。しかしながら、高校以降は、

図表5 学生のまち金沢に関する構築の概要

金沢学生のまち市民交流館	金沢学生まちづくり会議	カノウセイフェス	交流館コオーディネーター
12:00～13:30 市民協働推進課担当職員1名による講義・質疑、交流館内案内	13:30～14:00 学生団体との学生まちづくりについての意見交換	14:30～17:00 学生団体の活動発表会の見学と交流会参加	17:00～18:00 コオーディネーターへのヒアリング
			

(4) 学生団体の設立とサポート

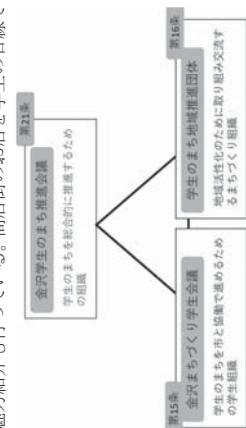
金沢市では「金沢市における学生のまちの推進に関する条例」に基づき、まちづくりを行うために3つの関係を軸とした推進体制を整えている(図表6)。

1つ目が「金沢まちづくり学生会議」という学生組織だ。これは学生のまち金沢の母体となる組織であり、学生ならではのアイデアとエネルギーを活かして創造的なまちづくり活動に取り組んでいる。「金沢まちづくり学生会議」の活動は多岐にわたり、令和元年度の第10期生は、7大学から参加した53名が所属しているという。学生会議の詳細をいくつか紹介する。まず、学生団体のメンバーを募るため、また学生に金沢の良いところを知ってもらうために「OPEN CITY in KANAZAWA」というイベントを開催している。「たった一日で金沢が好きになる。」をコンセプトに毎年100人以上の新生を招待し、先輩メンバーと金沢の名所を回るイベントで、街歩きのほか様々な体験ができる仕様になっており、現地の人と交流を深めながらまちのことを理解できるイベントになっている。

また、学生会議のメンバーが主催となって「まちなか学生まつり」という催しを行っている。運営は学生会議のメンバーのみで行い、ステージパフォーマーのほか、学生団体による屋台、地域の名物の屋台などが出店され学生が中心になり地域住民と交流が盛んでもある。毎年商店街で開かれる「木倉町ふわりん祭」では学生組織のメンバーがスタッフとして参加し、地域住民とのコミュニケーションの機会になっている。更に、昔から続く祭を若者が支えることにより風化を防ぐという働きも見られるだろう。商店街での交流は他にもあり、「金沢学生セレクション」と称し、Facebookを用いてまちなか商店街の魅力紹介も行っている。商店街のお店を学生の目線で紹介し、街に人を集めようという企画だ。

FacebookなどのSNSを使用した宣伝は若者ならではのもので、そのような発信手段を持たない地元住民との良い連携が生まれていると考えられる。

そのほかにも、金沢まちづくり学生会議は他のまちづくり団体との交流もある。他団体と交流しつつ活動報告や情報交換を行うとお互いの知識を増やしたり、他県の大学に金沢まちづくり学生会議の活動を説明するトークライブを行ったりし、他県でまちづくりを行う学生との交流の場を設けた。



図表6 金沢市における学生のまちの推進体制
資料:金沢市民協働推進課提供資料を参考に作成

以上のような活発な町おこしや地域イベント、地域の人々との交流の場が学生による団体活動、運営されており金沢は学生が積極的に関与しているといえる。なお、本事業の年間運営資金は220万円のことである。

2つ目は学生のまち地域推進団体という団体だ。学生のまち地域推進団体とは学生、住民及び高等教育機関が地域活性化のために取り組み、交流するまちづくり組織である。上記にある金沢まちづくり学生会議の団体と相互連携を取り、さらに学生たちのサポートを担っている。主な活動としては学生と市民とのコミュニティを再生し、地域と学生がながりやすい状況にすることだ。学生と市民が共同で行うイベントを開催したり、学生が地域の活動や行事に参加し相互交流できる仕組みを作っている。また地域活性化にかかわらず、学生が住みややすく、暮らしやすいまちにするための定期的な協議もおこなっている。このように、まち自体が学生に協力的であり、学生は自分たちの思うまちづくりを行いやすい状況を手に入れることができる。

3つ目は金沢学生のまち推進協議の開催だ。金沢学生のまち推進協議とは学生のまちを総合的に推進するための協議を行う場である。協議内容は「学生のまち推進に向けた課題の整理や施策の検討」「学生のまち推進に向けた総合的な連絡・調整」などがあり、主に学生をいかに活性化させていくかという議題で会議を行う。この会議には参加するのは町会、婦人会及び公民館などの地域団体、高等教育機関、事業者、県、市、そして上記で紹介した金沢まちづくり学生会議と学生のまち地域推進団体の代表者だ。学生会議の代表者は今後どのような施策をおこなっていくのか提案できる場となり、学生のまち地域推進団体はそれまでの活動や課題を報告する場となる。

このような推進体制がとられているため学生はまちづくりに参加する機会が多く、また自らまちづくりに関わることができるよう提案することができ、その内容も県と市が管理かつサポートできるためお互いに理解を得た状況でのまちづくりとなる。

(5) 金沢学生のまち市民交流館

金沢まちづくり学生会議の活動拠点となっているのが「金沢学生のまち市民交流館」である(図表7)。この市民交流館は、学生と市民の交流の場、情報交換を通じてまちとの関係を深めるとともに自主的なまちづくり活動の場として利用され「にぎわいと活力の拠点」となることを目的に約5億円かけて改修・建設された施設である。(2)で記したように金沢は郊外に学校が多く中心街には学校が少なくない。この市民交流館は中心街に建てられた金沢市指定保存建築物を使用している。中心部にあることで、学生は集いやすくなり、また歴史の建造物であるため金沢の歴史や文化を感じられる施設となっている。市民交流館は2つの棟に分かれており、1つは学生の家も1つは交流ホールになっている。なお、当施設は、市が所有者から土地を含め購入し、運営は市が直接行っている。

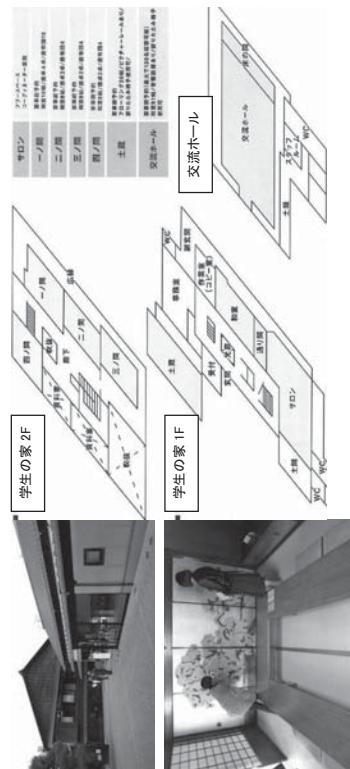
① 学生の家

学生の家には学生たちしか利用できないうちがあり、会議や打ち合わせなどで活用されている(図表7左下写真)。またサロンというフリースペースがあり、日替わりで常駐しているコオーディネーターがまちづくり活動や学生の相談に応じてくれる。コオーディネーターがいてくれることにより、学生は自分たちが考えているまちづくり活動をどのように展開させればいいのかわかる。また常に相談に応じてくれる人材がいるということが心の支えにもなるだろう。

② 交流ホール

交流のホールは最大130名収容することができ様々な活動の発表の場などに用いられている。実際、提案者たちも金沢まちづくり学生会議が参加していた「カノウセイフェス」という学生主体の企画を見ることができたのだが、開催場所はこの交流ホールであった。交流ホールは一般貸出の際は有料なのだが、学生団体の利用では無料であり金沢の学生団体の多くはこの交流ホールを活用している。

このように学生が集い、まちづくりを考えることができるスペース、また実際に企画として会場になりえる場が中心部にあることで金沢の学生は生き生きとまちづくりに取り組んでいるのではないだろうか。



図表7 金沢学生のまち市民交流館の様子
資料:写真は提案者から撮影、右の図は金沢学生のまち市民交流館「学生団体ガイドブック」の図表一部改変

4.2 宇都宮市の施策提案

(1) 宇都宮の高校生・大学生がまちづくりに参加できる環境づくり

① 学生団体の設立とイノベーションの活用

上記の現状分析と述べたように宇都宮の若者は宇都宮にある魅力を把握しきれきではない。しかし、愛着はある。その愛着をまちづくりに生かせないだろうか、と提案者たちは考えた。また提案者たちは金沢視察においてまちづくりに参加している学生と接した。彼等はまちづくりに通じて、さまざまな人と出会い、まちを好きになり、体験を通して得られた魅力を感じていた。このように、真の意味での都市への愛着、誇りとは地域のひととの密接なかわり合いによる良好な信頼関係から生まれるのではないかと、金沢市の視察を通して感じた。これらを受け私たちは「宇都宮若者まちづくり機構」の発足を提案する。

② 「宇都宮若者まちづくり機構」とは

「宇都宮若者まちづくり機構」とは宇都宮市が全面的なサポート体制を整えたいうえで、市内在住、もしくは市内の高校・大学生が集い、地域の課題に取り組む学生団体である。機構には、提案者たちが所属する宇都宮市創造都市研究センターも参画し、高校生、大学生のサポートを各大学の教員が担ったり、教室や機器の利用なども行えるようにしたりする。なお、本機構の担当部署は、みんななでまちづくり課や市政研究センターが適当と思われる。

③ 学生団体の発足

宇都宮市には市が運営する学生主体のまちづくり団体というものはない。そのため宇都宮市で学生によるまちづくり団体を発足したい。市が先立って団体を発足することによって、今までまちづくりに興味があったが何から始めていいかわからなかった若者をまちづくりに導くことができる。また、まちづくりに興味があった若者は自ずと集うだろう。発足した学生団体は現在行われているまちづくりに参加したり、また企画運営をして宇都宮への理解や知識を育んでいく。団員は宇都宮にある高校、大学に募集をかけ主に高校生と大学生を主とする。様々な学校から団員を募ることで視野が広まり、企画などの幅が広がる。また金沢市では大学生のみだったが、高校生も加わることで長く宇都宮のまちづくりに関わると同時に、県外流出を防ぐことができる。

④ 市から学生団体に対するサポート

はじめから学生たちのみで一からのまちづくりに進めたいのは難しいと思われる。そのため市には学生が参加できるようなまちづくり活動の紹介、またまちづくりに行われているのかという説明など、基礎となる知識の提供の場を設けてもらいたい。学生の見識が深ま

ることで行える活動も多くなる。

⑥ 活動拠点 イノベーションの活用

学生と一言一語でも、皆んていいる場所や活動している場所は違う。そのため、まちづくりに活動の際に金沢にあった学生のみならず市民交流館のような活動拠点があると、活動がスムーズにいく。この活動拠点にイノベーションが活用できないだろうかと提案したい。イノベーションはオリオン通りの中にある、宇都宮のまちづくり研究や中心市街地の活性化に資する事業の場として、宇都宮まちづくり推進機構が宇都宮市から借りて居場所である。宇都宮市の中心部に立地したイノベーションセンターには学生も集まりやすく、また中心部であるため地域の人も多い。これから自分たちがまちづくりに取り組む宇都宮の中心に活動拠点があれば、地域のひととの交流もしやすく、活動もはかどるだろう。またイノベーションセンターには発表や企画を運営するにあっても整備があるため行える。会議や打ち合わせだけでなく、実際の企画の場になるというとは非常に重要だ。イノベーションセンターは様々な団体が使用するため学生のためだけにとはいかないが月に使用日を決めて学生で集うことはできるだろう。

⑦ アドバイザーのサポート

またイノベーションセンターに集まり活動する際はまちづくりに対するアドバイザーが必要だと考える。まちづくりに学生たちだけで遂行するのは難しく、必ず県や市、地域のひととの連携が求められる。その際、アドバイザーがいることによって、学生たちが行いたいまちづくりに実現可能なものか、可能であればどのよう団体の協力が必要なのか、など相談できる相手がいることによって学生たちは効率よく、まちづくりに活動にいきなすことができる。

⑧ 活動の精査

年に2度前期後期で活動内容の精査を行う。これは学生だけでなく市や宇都宮市創造都市研究センターの先生方、地域の方、NPO等にも参加していただいで半年間の活動の進捗状況、成果などを報告し、それに対して改善点などをアドバイザーに報告する。

(2) 施策の効果

① 中心市街地の変化

そもそも、まちづくりに取り組む学生は少ない。もし学生団体が設立されたのであれば通年でまちづくりに行われるだろう。中心部のコミュニティは高齢化によって活気が失われている。まちづくりに常に若者がいる状況を作ることができれば活性化の芽となる。また、学生たちの中心部での消費を喚起できる。

② 学生による情報発信

学生たちがまちづくりに行う中で、その活動の様子や隠れた名店、優れた人物などを SNS で紹介することによって、宇都宮の魅力が発信できる。

③ 学生の宇都宮愛、シビックプライドの醸成

本事業最大の効果は、学生たちがまちづくりに通じて、地域の多様な人々と出会い、親密な関係から育まれる信頼関係である。まず、学生たちは地域の方々の語りや協働から、地域の歴史や文化、個々の人々の生き様、働くことの意味など様々なことを学ぶ。これにより地域のひと々に対する信頼、誇り、愛おしさが生まれ、それが最終的に地域愛、シビックプライドに変化していく。

金沢の学生団体との意見交換会で代表の学生が発した「まちづくりにとは人間関係です」という言葉が興味深い。都市とは人との連帯によって営まれ、その営みがまちづくりなのである。宇都宮若者まちづくり機構に所属する学生が地域に入り、地域のひと々に対する信頼が生まれる。これが真の意味での地域愛となり、宇都宮市のことを自慢できる人間になっていく。地域を自慢するためには、誰もが知るテーマパークや世界遺産が必ずしも必要ではない。「そこにとどのよう人間関係があるのか」が重要な点である。そうした関係性をたえずつくることであれば、若者たちはもつと宇都宮のことを市外の人々に自慢するようになるはずである。本提案は、若者と地域の関係性を深めるための取り組みと見てよい。この取り組みが脈々と展開されることによつて、100年後には宇都宮に住む人すべてが、宇都宮を自慢できる観光大使になっていくことだろう。

表-2 学生提案成果報告 (景観研究グループ)

No.10	提案名：宇都宮駅西口大改造計画—目でみてわかる宇都宮—
	提案団体名：プラットフォーム共同研究プロジェクト 景観研究グループ
	所属：宇都宮共和大学シテイルライフ学部／作新学院大学経営学部／文芸芸術学部美術学
	代表者：遠藤 陸 指導教員：西山弘泰、春日正男
	チームメンバー：遠藤 陸 (宇都宮共和大学2年)、猿山 凌 (作新学院大学3年)、浜井沙樹 (文芸芸術大学3年)、築島春菜 (文芸芸術大学3年)

○ 提案の要旨(Abstract)

本提案は、宇都宮駅西口における県都宇都宮の玄関口にふさわしい景観と誰もが楽しく・便利な駅前空間を具体的な構想図によって描き出すことを目的としている。近年、宇都宮駅東口の再開発事業の完成イメージが明確になったことや、LRTの駅西方面への延伸が示されたことにより、駅西口1街区において再開発の準備組合が発足し、再開発の機運が高まっている。この機を逃さず、市が所有するペDESTリアンデッキやその周辺を含めた一体的な再開発が求められる。

提案者たちは2019年2月と10月に宇都宮駅西口周辺の課題を明らかにするために現地調査を実施した。その結果は以下となっている。

【景観・防災・土地問題】

- 古く、形状がちぐちぐで、げげばい色の看板が目立つ
 - 大通りの両側に老朽化した低層の古い建物が並んでおり、土地利用、防災上の問題がある
- 【交通モードの交錯】
- 歩行者、バス、タクシー、自転車、自転車が同一空間で交わり、非効率的な状態となっている
 - 歩行者が安心して利用できず、車優先の構造になっている

【利便性の欠如】

- 乗り場が多いため目的地に向かう路線がわかりづらく、また階段の上り下りも大変である
 - ペDESTリアンデッキやその周辺には利用目的が不明な空間が多数存在する
- 以上の結果をもとに宇都宮駅西口周辺における再整備・再開発のコンセプトは第一に、「一体的な再整備・再開発」、第二に「宇都宮らしい空間と景観の創造」、第三に「歩いて楽しく便利な交通の結節点」である。これをもとに描いた西口周辺の再整備・再開発は次のとおりである。
- 【再整備・再開発のエリア】駅西で再開発が行われていない街区に加え、築30年のララスクエアの第一地区も含む。また、市が所有するペDESTリアンデッキ部分、市営駐車場も一体的に行うことで、大胆な統一感ある空間が形成される。
 - 【LRTと電停】駅舎を出るとドーム型のデッキが二荒山神社方面に向かって伸びていて、中心部に竹昆の雷を鑑賞できるようにする。路面電車はデッキの上を通り、電停は駅舎を出てすぐの場所に配置し、乗り換えの利便性を高める。
 - 【デッキ内の機能】デッキの一部はオープンカフェにし、談笑しながら、竹やLRT、夏には宇都宮名物の雷を鑑賞できるようにする。デッキ上には、二階建ての大谷石蔵を模した飲食店や観光案内所、栃木や宇都宮の土産店を配置する。
 - 【その他の交通】1階部分は、大通りに向かって広い通路がある。その両側に円形のロータリーを配置する。北側はタクシー乗り場と一般乗降車場、約50台分の送迎用駐車場、同数のタクシー待機場を配置する。南側はサークル状の路線バス、高速バス、スクールバスの乗り場にする。
 - 再開発の建物には市内大学の合同キャンパス、シネコンが入った大型商業施設と総合病院、数棟の高層マンション、高級ホテルとオフィスビルの複合ビルを建設する。

1. 提案の背景・目的

提案者は、宇都宮中心部のまち歩きをする中で、建築年代や高さ、色などが統一されていないことに違和感を覚えた。どうして大手地区のように再開発が行われ、新築の高層マンションが建設される場所と、古く低層の建物が並ぶ地区があるのか、これが宇都宮の景観に着目したきっかけである。

宇都宮駅西口は、雑誌で「醜い景観 25選」に選ばれたなど、不名誉なかたちで知られたスポットでもある。確かに駅前には緑や赤の消費や金の看板が目立ち、大通り沿いの建物は高さが不揃いである。老朽化が進んでいる。こうした状況で、本館に市民や県民は郷土愛を持っているのか。また栃木県や宇都宮市に来た観光客に、当地域の魅力や感動を与えることができるのか。提案者たちは、こうした素朴な疑問や問題意識から、宇都宮駅西口地区(以下、西口地区)の再整備構想を思い立ったのである。そこで本提案は、西口地区における県都宇都宮の玄関口にふさわしい景観と誰もが楽しく・便利な駅前空間を具体的な構想図によって描き出すことを目的とする。

2. 提案の目標・SDGsとの関連

本提案とSDGsとの関連では、17の目標のうち、「3. すべての人に健康と福祉を」「9. 産業と技術革新の基盤をつくろう」「10.人や国の不平等をなくそう」「11.住み続けられるまちづくりを」の4つが該当するものと考えられる。

「3. すべての人に健康と福祉を」「10.人や国の不平等をなくそう」に関しては、誰もの利用しやすい駅前空間をつくることで、駅や鉄道、路面電車を利用しやすくなり、さまざまな年齢や障がいのある人々の利用を促進する。「9.産業と技術革新の基盤をつくる」では、駅前に学生が多く集まる空間ができることで、多様な専門を持った学生間でのアイディアの交流が図られ、引いてはビジネスやまちづくりを行う業地がつくれる。また、「11.住み続けられるまちづくりを」に関しては、県や市を象徴するような空間が生み出されることによって、市民が都市への愛着や誇りを持つことができ、まちづくり・地域活性化の機運を高めることができる。

3. 現状分析

3.1 宇都宮駅西口地区における再開発とその歴史

宇都宮市では、これまでに二荒山神社周辺と、JRR宇都宮駅西口周辺で、再開発事業が行われてきた。これまでに完了しているのは図表1に示した8つの再開発地区である。宇都宮で第一号となるのが、本提案で取り上げる西口地区に含まれる宇都宮駅西口第一地区である。一方、二荒山神社周辺では、今年5月までペバルコ宇都宮店が入居していた宇都宮相生地区をはじめ現在までに4つの再開発事業が実施されている。近年では、栃木県最高層で注目を集めた宇都宮大手地区の宇都宮ピークスタが記憶に新しい。しかしながら、当地区においても⑨や⑩の再開発計画がまもなく、老朽化した建物が宇都宮の景観を損ねている。

さて、ここからは地区における1980年以降の動きについて概説したい。当地区における再開発の議論は、新幹線開通による駅舎の新築、駅前空間の整備にあたり、宇都宮市が出した「宇都宮駅西口周辺整備審議会」の答申であった。このことから、市は再開発に向け、各種調査、地権者との対話の場として「宇都宮駅西口地区まちづくり研究会」(その後「宇都宮駅西口再開発準備会」)を発足させ、再開発の計画が議論された。1985年、宇都宮市第一号の再開発となる宇都宮駅西口第一地区の事業着手が決定され、翌年三井不動産デベロップメントとすることで、事業が進んでいく。その結果、1990年にイトーヨーカドー系の百貨店「ロビンソン百貨店宇都宮店」が入居した商業ビルが竣工する。

めに一時利用する場所であり、長時間の駐車は許されな
い。ところが多い車は、1分以上停車し、空間を独占し
ている。中にはタクシードライバー専用バスや乗客の降車場にま
で駐車している者もいる。そうしたドライバー専用バスが
原因で、乗降場は常に混雑しており、空きを待つ一般車
が周辺に駐車したり、ロータリーを周回するなどして、余
計な通過交通を増やし、それが歩行者の安全を脅かす結
果にもなっている。

(3) 利便性の低さ

宇都宮駅西口広広場は「利用するバスがわかりにくい」
「バリアフリー化の状況」など、その利便性向上が指摘さ
れている(図表3)。路線バスに関しては、多くのバスが
宇都宮駅に集中するために、路線数が多く、バス乗場がい
くつにもわかれていて、行先がわかりにくいだけでなく、
乗り場間の行き来が非常に不便である。また、バスを降り
て駅に行くためには、エスカレーターか階段を利用しな
くてはならず、不便である。また、東口に行くためには、
駅を降りて北に50mほど移動せねばならず、初めて利用
に慣れない人にとっては、わかりづらい。大通りから
一直線に東口までの通路があれば、わかりやすく便利である。

高速バスや大学の送迎バスの乗り場も課題がある。高速バスは、広場南側のチサ
ンホール前にある。なぜ路線バスの乗り場がないのかわからない。また、それ
だけでなく、狭い歩道に駐輪場があると歩道が狭くなり、歩行者にと
って不便で危険である。地上に駐輪場を設けると、広場内の自転車の通行が増え
てしまう。駐輪場の配置や収容台数に課題がある。宇都宮市は「自転車のまち」を
標榜しているのだから、自転車利用の利便性を高めなくてはならない。

道路に無数の駐輪場が配置されているが、常に満車で駐輪する
ことができない。また、それだけでなく、狭い歩道に駐輪場があると歩道が狭
くなり、歩行者にとって不便で危険である。地上に駐輪場を設けると、広場内の
自転車の通行が増え、歩道が狭くなり、歩行者にとって不便で危険である。宇
都宮市は「自転車のまち」を標榜しているのだから、自転車利用の利便性を
高めなくてはならない。

3.3 駅前整備に関する他市の事例

提案者たちは、目的に掲げた宇都宮駅西口広場の参考にすべく、11月11日(月)に金沢市と富山
市にヒアリングと視察を実施した。金沢市では主に駅前広場について、富山市ではLRTの効果や
LRTの南北接続についてお話を伺った。

(1) JR金沢駅東広場・西広場

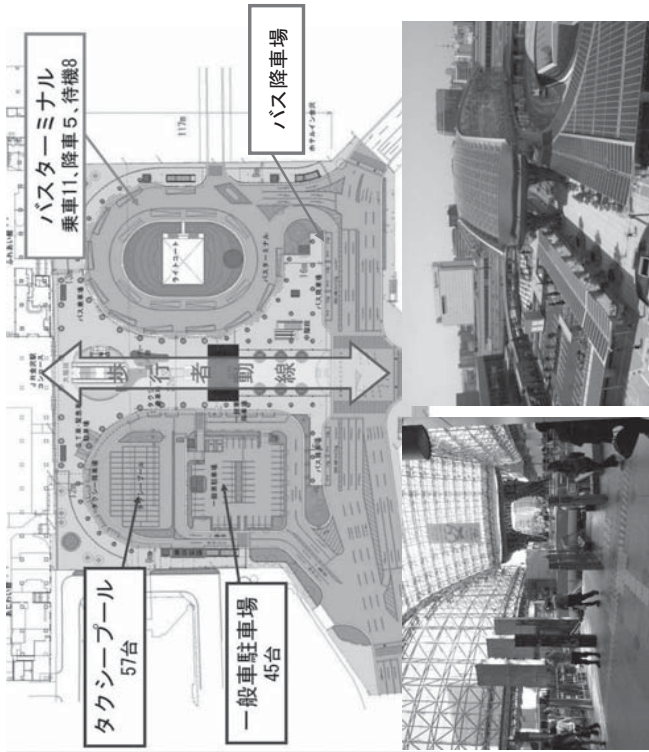
JR金沢駅は「世界で最も美しい駅14選」に日本でただ一つ選ばれている。その象徴ともいえる
のが、東広場中央に位置する「おもてなしドーム」と「鼓門」である(図表4)。金沢駅を出た瞬
間に現れる、天井が高く開放感があるおもてなしドームとその先に鼓門がある景観は、観光客の
心をつかむ。実際に提案者たちもその景観に圧倒され、強い感動を覚えた。

まず、当駅東広場は北陸新幹線延伸を見据え、2005年に完成、供用を開始した。地上と地下の
2層に分かれ、地上の総面積は27,000㎡、地下は10,550㎡となっている。従前の駅前広場は17,800
㎡で分設したが、北側の北陸鉄道所有地等などを合わせた区画整理事業を実施し、地下に北陸鉄道金
沢駅を移設することで、地上広場の増幅を実現した。東広場の総工費は172億円、うちおもて
なしドームが42億円、鼓門3.5億円となっている。地下は北陸鉄道の駅とイベント広場になって
いる。イベント広場は無料と有料のスペースに分かれており、年300回を超える稼働率である

図表3 西口広場の改善が必要な点につ
いての市民アンケート調査の結果

駐車の利用しやすさ	379
駅前広場の利用の円滑性	361
利用するバスの分かりやすさ	286
駅前広場、道路の安全性	284
歩行時の安全性	248
バリアフリー化の状況	243
駅前広場の一般乗降場の分かりやすさ	181
広場の大きさ	151
歩行時の快適性	143
駐輪場の利用しやすさ	141
駅前広場の一般乗降場までのアクセス性	92
自転車走行時の安全性	70
自転車走行時の快適性	55
バス乗場までのアクセス性	45
駅前広場のタクシー乗り場までの分かりやすさ	28
駅前広場のタクシー乗り場までのアクセス性	13
その他	39

資料:JR平越宮駅西口周辺地区に関する市民
アンケート調査結果より作成
注:本調査は宇都宮市が2014年に市民1,000人
に対して行ったアンケート調査の結果である。



図表4 金沢駅東広場の平面図とおもてなしドーム内(左)、全景(右)
資料:平面図と右の写真は金沢市からの提供資料の一部を改変、左の写真は提案者

いう。なお、東口広場の再整備には、前市長・川出保氏の意向や思いが強かったようである。
東広場の基本構想は「広場の広場」「歩行者優先広場」である。一方、整備方針は「金沢らし
さの創出」「充実した歩行者空間の確保・バリアフリー」「交通結節点としての合理性と機能性の
追求」「出会いとにぎわいの創出」「環境への配慮」である。まず「金沢らしさの創出」では、おも
てなしドームと鼓門がその象徴となっている。おもてなしドームは、傘をモチーフに設計されて
おり、冬季の雨が多い金沢において、金沢人のおもてなしの心を体現している。また、鼓門は加
賀宝生と言われる能の流派で使われる鼓を模している。「充実した歩行者空間の確保・バリアフ
リー」では、西側の駅前通りから、ほぼ同じ広さの通路が西広場から駅を通り東広場に出て、さら
に東広場の中心を貫いている。このように歩行者空間が中心据えられ、その軸がはっきりしてわ
れている。「出会いとにぎわいの創出」に関しては、地下の広場がその役割を果たしている。
次に「交通結節点としての合理性と機能性の追求」を詳しく紹介する。図表4の平面図にある
ように、東広場では歩行者通路を中心に、南にタクシードームとタクシードーム、一般乗降場
が、北にバスターミナルがそれぞれ配置されている。バスと人、その他の交通が完全に分離され
ている。バス専用ミニナルはサークル状になっており、乗り場が一続きで分かりやすい。駅を出る
クルの内側にあり、スペースが無駄にならない。降車場は新幹線と並行して走る道路上に配置さ
れ、降車場と乗車場が完全分離されていて、効率的な乗降車場が実現されている。タクシードームは
南側のタクシードームおよび一般乗降場についても工夫がなされている。タクシードームは

したことにより、中心市街地に立地する2つの小学校の児童数が2007年の839人を底に、2018年には1,020人まで増加している。

すべてがルーパ化の影響ではないかもしれないが、路線を新設した沿線がかなり多くの民間投資が行われたことは興味深い。路面電車の開通は、確実に都市に投資や人口を呼び込み、活性化の起爆剤となる。宇都宮において、市の西方面延伸への対応如何で、西口再開発が大きく動く可能性がある。また大通り周辺の民間投資、地価上昇も見込める。こうした効果は、税収の増加となり、すべての市民が恩恵を受けることにつながる。

② 路面電車の南北接続と富山駅での乗り換えの工夫
先述のように、北の富山港線と富山地方鉄道市内線が2020年3月に接続される。それに伴って、富山港線は現在運営を行っている富山ライトレール株から富山地方鉄道に業務が譲渡され、市内路面電車の運営主体は一本化される。料金もすべての路線で大人210円と一律になり、市内での移動がこれまで以上に便利になる。

富山市における路面電車南北接続事業は、北陸新幹線開業が契機となった。あらかじめ駅舎は支柱なども接続部分の間隔を広げるなど、それを見越した設計になっている。よって、既存の駅舎、軌道路線を横断しようとしている宇都宮の接続事業とは大きく異なる。

富山駅では路面電車と新幹線・在来線への接続の簡素化が図られている。路面電車のホームと新幹線・在来線の改札口が向かい合っており、双方への乗り換えがわかりやすく、便利である(図表5右図)。提案者らも金沢から新幹線で富山に向かい、新幹線改札を出ると目の前に路面電車のホームがあり、その分がわかりやすく、利便性の高さに驚いた。路面電車の中から新幹線改札方面を撮影したものが、図表5の真ん中の写真である。電車を降りて、40mほどの場所に改札がある。なお、2014年に富山駅内に路面電車駅を整備したことによって、新幹線・在来線との接続が容易になり、定期利用者が通学で27%、通勤で34%も増えたという。接続が容易になることは、利用者の増加をもたせることが実証されている。宇都宮でもバス乗り場や路側がわかりやすければ、もともと乗客を増やす可能性がある。また、西側にLRTを延伸する場合は、多少コストが高んでも駅を出てすぐの場所、すなわち2階に路面電車の駅を配置すべきである。

以上、富山のLRTによるまちづくりの例をみると、LRTを中心市街地に延伸してこそ、まちづくりや街の活性化に寄与すること、利用者を増加させるためには、他の交通モードとの接続を簡素化することが必要であることがわかった。宇都宮市においても西口方面にLRT路線網を広げることが絶対に必要である。

4. 施策事業の提案

4.1 宇都宮駅西口再整備・再開発のコンセプト

本節では3.2で示した西口地区の問題点、3.3で示した金沢市と富山市の例、さらには宇都宮市が2014年に示した「JR宇都宮駅西口周辺地区整備基本計画」などを参考に、西口地区の再整備・再開発のコンセプトを示す。

第一に「一体的な再整備・再開発」である。バラバラに再開発を進めても、結局以前と同じような景観が出現するだけである。駅前周辺の地権者と民間事業者、それから行政が一つのコンセプトをもとに、共通の認識と意思を持って、事業を進めることが重要である。宇都宮市は市営駐車場やバス乗降場を含め、地権者として再開発に取り組み、その中心的な役割を担う。

第二に、「宇都宮や栃木らしい空間と景観」である。一目で「宇都宮だ!」とわかるような、地域の資源や色を活かした空間、景観を演出すれば、宇都宮市民の都市への誇りや愛着が醸成される。金沢駅のように、誰もが感動する駅前空間が形成されれば、そこが一つの観光スポットになり、観光客増加も期待できる。さらに、駅の様子が旅行会社のパンフレットや雑誌に載ることによって、宇都宮のイメージを大きく変えることができる。駅前整備には金沢市同様、200億円かそれ以上の建設費が必要になるだろう。しかし、その投資は観光のみならず、事業立地や高度人材の確保、人口流出阻止にもつながり、長期的には宇都宮市に大きな利益をもたらすと考える。

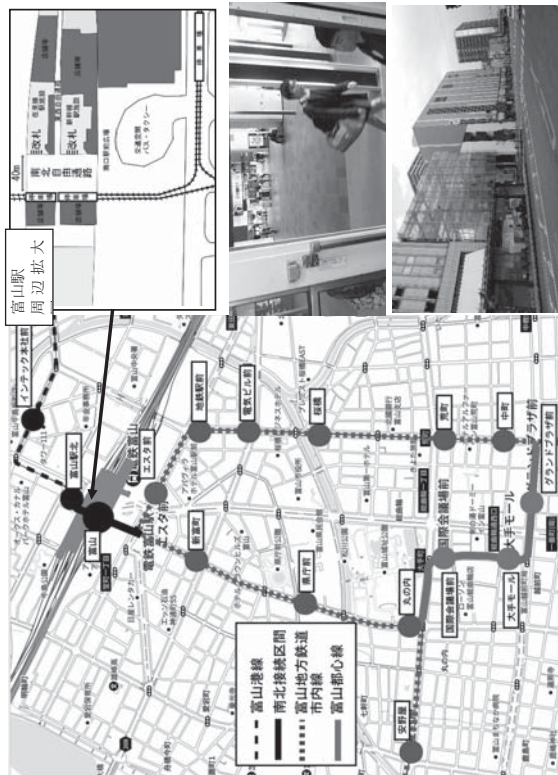
一か所、誘導員が配置され、大きな荷物などは誘導員が後部座席に収納してくれる。一般駐車場は送り迎えでの利用が中心で、20分間は無料だが、それ以降は周辺駐車場よりも高額になっている。長時間利用を抑えている。そのため、駐車車両の回転が速い。

一方、金沢駅西広場は、総工費26億円を費やし、2013年に完成した。コンセプトは「玄関口にふさわしい顔づくり」「交通機能の充実」「人や環境にやさしい広場」である。顔づくりでいうと、現代芸術の巨大なモニュメントが目玉を引く。交通機能としては、西広場に類似した設計になっているが、観光バスの発着場があるのが特徴である。北側に向かう歩行者空間1か所に信号機がない横断歩道があるが、誘導員が配置されている。

(2) 富山市におけるLRTの効果と東西接続事業
富山市には、南側に富山地方鉄道市内線と、北側にJRから営業を引き継いだ富山ライトレール富山港線の路面電車走っている(図表5)。富山港線に続き、富山市が実施した路面電車関連施策は、2009年の富山地方鉄道線の間に路線を新設することによる乗客増加である。これにより既存の路線と合わせ、総延長3.4kmの環状線が生まれ、市内中心部の回遊性と利便性が大きく高まった。2020年3月には、JR北陸新幹線の北側を走る富山港線と南側の路線が接続される。

① LRTのルーパによる中心市街地への影響

富山市は平成19年に富山市中心市街地活性化基本計画を策定し、公共交通による中心市街地の活性化、まちなか居住を掲げる。その一環として、富山市の商業の中心である平和通り周辺地区の活性化等を目的とした路線のルーパ化を2009年に実施する。このルーパ化によって、市内路面電車利用者がルーパ化前は10,251人だったのに対して、2018年には14,601人まで増加した。また、マンションや商業施設を中心に、民間投資が相次ぎ、地価も富山駅や環状線沿線を中心に上昇し、富山市全体でも全用途平均の地価が6年連続で上昇する結果となった。図表5の最下部の写真はグランドプラザ前のものであるが、全天候型のイベントスペースが設置され、さらに奥には2つの新築マンションが建設されている。それら分譲マンションの建設によってファミリー層が増加



図表5 富山市中心部の路面電車路線とその沿線の様子
資料:地図はYahooマップをベースに作成、写真は提案者たちが撮影時に撮影

第三に、「誰もが便利で歩いて楽しい交通の結節点」である。現在の駅前は、歩行者にとってとても不便な構造である。駅から二次交通への乗り換えがスムーズで、買い物や観光案内所に行くにも迷わず、宇都宮のことを知らない人でも利用しやすい空間の創造が求められる。また歩行者と車両との接触を避け、歩行者優先の”歩いて楽しい空間”にするべきである。さらに、一般車の侵入を極力抑え、各交通モードを分離し、どこに何があるのかを明確にする。そして、最後に若者が多く集い、そこで様々な情報交換が行われ、まちづくりやビジネスのアイデアが生まれる空間を創出する。

以上のコンセプトをもとに、提案者たちは西口地区再整備・再開発のキャッチフレーズを「歩いて楽しい・目で見てわかる・石の街うっけのみや」とした。

4.2 宇都宮西口地区再整備・再開発における具体像の提案

以上のコンセプトに従い西口地区の再整備・再開発構想を提案する。

(1) 再整備・再開発対象エリア

西口地区で再開発が行われていない図表1に示された⑩の範囲だけでなく、宇都宮西口第一地区(現ララスクエア)も築30年が経過するため、その対象地区とする。これにより、より壮大かつ一体的な事業が展開できる。また、市が最大の地権者となり、市の意向を最大限反映できるようにする。

(2) 駅前広場のデザイン

駅前広場はどのような天候に左右されたいか。図表6下部図に示しているように、広場の内部は光を最大限取り込み明るい空間を演出するためガラス張りとする。また、夏には宇都宮名物の雷も鑑賞できる。ドームの枠は、日光街道の杉並木にちなんで、杉材を採用する。図表7にも示されているように、デッキは大通りを二葉山神社方面に延び、田川との合流地点で地上に降り、これにより、歩行者はスムーズに二葉山神社方面に徒歩で移動することができる。また、田川のせせらぎを高所より楽しむことができる。

デッキにはLRTの線路と電停が配置される。デッキの中央部分は吹き抜けになっており、そこには孟宗竹が植えられて、竹によって和の雰囲気と日影をつくり涼を演出する。なお、竹は若山農場の竹林をイメージしている。

デッキの両脇は店舗などを配置する。地産地消型の飲食店とカフェ

(内装に大谷石をふんだんに使った「石カフェ」)、観光案内所と栃木県や宇都宮市のお土産、六次産業商品、工芸品などを購入できる店舗を併設した店舗などを入居させる。店舗等の外装は大谷の石舗をイメージしている。デッキ部分は敷石は、大谷石よりも固い那須町で採掘される芦野石を用いる。最後に外観のデザインだが、旧帝国ホテルを模したデザインとなっている。駅舎の風景が写真に収めやすいうように、また外観の広さを広げ、そこも親水広場とする。

(3) 交通機能

まず2階部分では、電停を駅舎出入口から出ですぐの場所に配置する。これによりJR利用者は、容易に路面電車を利用できる。電停には10mおきに横断場所を設け、電車通過時には警報と光で電車の通過を知らせる。宇都宮駅内に新たに東西自由通路を設け、大通りから一直線に東口に抜けられるようにする(図表7)。

1階部分は主に自動車乗降場、南側にタクシー乗り場、一般車降車場、50台分の送迎用駐車場に配置する。なお、駐車場は10分間無料とし長時間利用させない工夫をする。バス乗り場には高速バスも乗り入れられるようにする。

(4) 再開発エリアの建物と用途

最後に再開発エリアにどのような用途の建築物が建設されれば、誰もが便利で訪れたい西口地区になるかという点を述べていく。

まず、再開発ビルは市内4大学と8短期大学の合同キャンパスを建設してはどうか。宇都宮市の大学は、ほとんど郊外にあり、学生間の交流が少なく思う。これは提3大学連携ゼミである提案者が卒業生に感じた課題である。提案者たち自身は考えもしなかった学生が、それぞれの強みを活かして、それを融合させれば自分たちでは考えもしなかったアイデアが生まれる。創造都市研究ゼミの活動を通して、学生たちが交わり、議論することの大切さを知った。また、キャンパスが駅前であれば、その学生たちが地域に出て、宇都宮の文化や歴史、さまざまな人に関わる機会が増える。学生と地域・企業が変わることによって、新たな活力や発想が生まれ、地域活性化につながっていく。

次にシネコンが入った大型商業施設がほしい。提案者たち学生は、よくシネマコンプレックスに映画を観に行く。しかしどこも郊外にあり、自家用がないと不便である。若者をもっと集めるためには、まちなかにそうした施設を含んだ商業施設があると、若者ももっと中心部を歩き、買い物をするはずである。一方で、シニアや子育て世帯などにも配慮をした施設も計画したい。再開発予定地の一部には高層マンションを数棟建設し、それに総合病院を併設したい。宇都宮市の大型の総合病院においても郊外に立地している場合がほとんどである。一方、中心部は療養型かそれに近いものがほとんどである。若者男女が安心して暮らせる空間が求められる。

最後に高層の再開発ビルに、オフィスビル、高級ホテルを入居させる。宇都宮駅東口には三星高級ホテルの建設が予定されているが、西口にはそうしたホテルがない。駅前広場の完成によって、多くの観光客が訪れる宇都宮市には、東口、西口双方に高級ホテルが必要である。

以上のように宇都宮西口地区には、居住機能、商業機能、交流機能、医療機能、そして教育機能が揃った、どの都市にもみられない便利な、魅力的で、魅力的な空間が形成される。そして、この再開発地区と東武宇都宮駅周辺地区がLRTで結ばれることにより、宇都宮の中心がより鮮明になり、宇都宮市のコンパクトシティが実現されることになる。



図表7 駅前広場の配置図



図表6 駅前広場の構想図

表-3 学生提案成果報告 (起業研究グループ)

No. 14	提案名：起業しなくともSDGsな未来都市うつつのみや 「UTSUNOMIYA VALLEY 計画」
	提案団体名：プラットフォーム共同研究プロジェクト 起業研究グループ
	所 属：宇都宮共栄大学シテライティブ学部／作新学院大学経営学部／ 文星芸術大学芸術学部
	代表者：松田 さりか 指導教員：西山 弘泰・春日 正男
チームメンバー	松田さりか (作新学院大学3年)、ドアン・ホン・ハイ (宇都宮共栄大学2年)、柳澤芳樹 (作新学院大学3年)、吉田 瞳 (文星芸術大学3年)

○ 提案の要旨

私たち起業研究グループは、宇都宮をシリコンバレーのように起業がしやすく、産業振興ができる経済特区形成を目的として、「学生アントレプレナーシップ支援制度」を提案する。すなわち、我が国の方向性を参考に、「SDGsな未来都市うつつのみや」を目指し、今後の宇都宮市の成長市場の創出を図り、地域活性化に繋げ、今後も成長し持続可能な宇都宮市を創出することである。現在、宇都宮には20団体以上の起業支援団体が存在しており、様々な方面で精力的に活動している。特に、新しい考えや熱意で今後の宇都宮を担っていく「高校生/大学生」の世代の活躍は「SDGsな未来都市うつつのみや」の実現に重要である。

しかし、現在の宇都宮市には、「高校生/大学生」には起業の知識の周知は十分であるとは言えない。支援団体には各教育機関への支援が難しいという課題もある。その結果、世界的にも開業率が低い我が国においては、日本の学生は起業という選択肢に興味関心を抱くきっかけが少なく、知識を得る機会を逃してしまっている。この点への注目が必要である。

この観点から高校・大学生の興味関心を掘り起こすため、今回、本年11月17日に、私たち学生による起業研究グループの企画主催で学生向けの起業啓発イベントを行った。この企画の前後のアンケート調査の結果、この催しによる起業への興味関心には大きな効果があげ、本イベントの有効性が高いことが分かった。この結果を踏まえ、今後は学生主体の起業支援団体を作り、市内での定期的な活動や教育機関での講義などを行っていく計画を立てている。そして、この活動事業が成功すれば、起業家精神にあふれた市民や魅力的な店や施設が集まった都市としての成長が現実のものとなり、「SDGsな未来都市うつつのみや」への道が着実に拓かれ、我が国、さらには、世界から注目される都市になることが期待される。

1. 提案の背景・目的

私たち創造都市研究グループは、昨年3月から宇都宮の活性化をテーマに活動をしてきた。その活動を通して浮かび上がってきたのは、宇都宮市では、キャノン、本田技術研究所、スバルやNTT 東日本などの大手を中心とする製造業等の産業が活発な一方で、宇都宮市を起源とするベンチャー企業が少ないという現状結果であった。

そこで、起業研究グループは「起業がしやすく、したくなる宇都宮」をテーマとして宇都

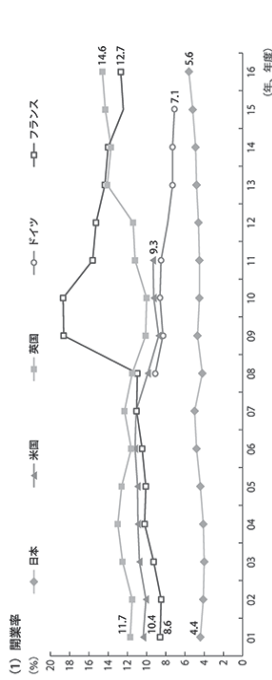
宮市の将来の成長市場の創出を図り、地域活性化に繋げ、今後も成長し持続可能な創造都市を実現できる起業に注目した研究していくことを目指した。

我が国は、図表1に示すように、世界の先進国の中でも起業を考える人の割合が少ないといわれている。これは、新卒一括採用や終身雇用制度、労働者の権利の強さなど、日本独自の労働環境によるものであり、一概に悪いこととは言えない。しかしながら、チャレンジ精神や想像力、主体性といった新たな価値を生み出す能力や資質が激烈なグローバル社会を生き抜く術として求められているなかで、日本人にそうした起業家精神が失われていき、日本の国際競争力が低下していくことも危惧される。

日本は決して起業が難しい国ではない。日本で起業が少ない直接的な要因は、そもそも日本人が起業活動をしない、自分でビジネスを興そうとする意識が希薄だからである。

こういった問題から、起業の意識がない若者に対して、卒業後の進路として「就職か進学か」という二者択一の選択肢から、「起業」という第三の選択肢を提示してさまざまな選択肢、働き方があることを広報し、起業のすばらしさを呼びかけることが本事業の目的である。

図表1 開業率の国際比較データ



資料：日本：厚生労働省「雇用関係事業年報」(年度ベース) 米国：U.S. Small Business Administration 「The Small Business Economy」 英国：Office for National Statistics 「Business Demography」 ドイツ：Statistisches Bundesamt 「Unternehmensgründungen, -schließungen, Jahrbuch, Rechtsform, Wirtschaftszweige」 フランス：INSEE 「Taux de création d'entreprises」

2. 提案の目標・SDGsとの関連

この提案の目標は、若者に「起業」という選択肢を身近にすることである。宇都宮をアメリカのシリコンバレーのような起業家精神に満ちた若者が集う都市にしたい。そこで、これまで宇都宮市経済産業政策課が行ってきた起業支援に加え、新たな支援策を提案したい。そのために、起業しやすく、したくなる環境を創ることに注目した。

この事業は、起業家の実情や行政の支援策などを周知させるための起業啓発イベントを企画し、実行する計画である。これは、ただイベントを開催して終わるものではなく、これを通して若者に起業という選択肢を与え、起業に関心を抱かせる。そして宇都宮に起業するものが増え、その起業家たちにイベント協力をしてもらおう。また起業に関心を持つ若者が増え・・・といったサイクルが望め、持続可能性が担保される。その結果、宇都宮は経済的に

活発的になり、流動人口増加が期待できる。本提案はこの計画のための‘先駆け’を目指す。

3. 現状分析

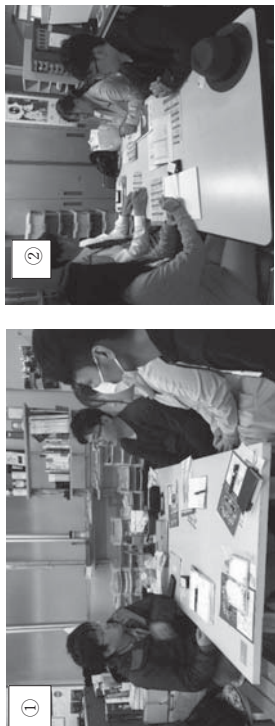
(1) 起業支援の現状

起業研究グループは、3月から4月にかけて起業支援を行っている団体と行政に起業支援の現状のヒアリング調査、意見交換を行った。その後、起業に関するイベントに参加し、11月に起業啓発イベントを起業研究グループが主催となって開催するに至った。なお、これらの活動の概要については図表2にまとめられた。

図表2 起業における調査のためのヒアリング等

3月	NPO法人とちぎユースサポーターズネットワーク岩井氏へのヒアリング 宇都宮市役所地域産業政策課へのヒアリング
4月	株式会社クリエーションズ 江氏へのヒアリング ベトナムダイニングジャディン グエン氏へのヒアリング セレクトショップOODAMA 今井氏へのヒアリング
8月	栃木県ブチ起業応援フェスタへの参加
9月	宇都宮アクセラレータープログラム2019への参加
10月	コンソーシアム授業「起業の実際と理論」への参加
11月	起業啓発イベント「起業という選択肢を考えてみよう」企画及び実行

写真1 起業支援調査ヒアリング（3月22日撮影）



1) 起業支援調査ヒアリングの結果

NPO法人とちぎユースサポーターズネットワーク岩井氏によると、20以上の起業支援団体がより積極的に活動しているが、あまり周知されていない、とのことである。このため、起業セミナーなどを開催しても起業に興味のある人しか来ない。したがって、起業に関心のない人にとりやってみようというアプローチをするのが課題であると話していた。また、起業支援機関の相談役に起業に関心を持つ多くの人が欲しいとも話していた。（写真1-①）

この点からも、起業のすばらしさを多くの人に訴求する活動が重要である、といえる。

宇都宮市経済産業政策課の方々は、宇都宮市は相対的に起業が少ない都市であること、高校に行政が接点を持つことが難しく、高校生や大学生にどのように起業教育をしていくかが課題であると話していた。また、大人が起業に理解がないことも要因の一つではないかと話していた。（写真1-②）

写真2 起業家へのヒアリング調査（4月撮影）



2) 起業家へのヒアリング結果

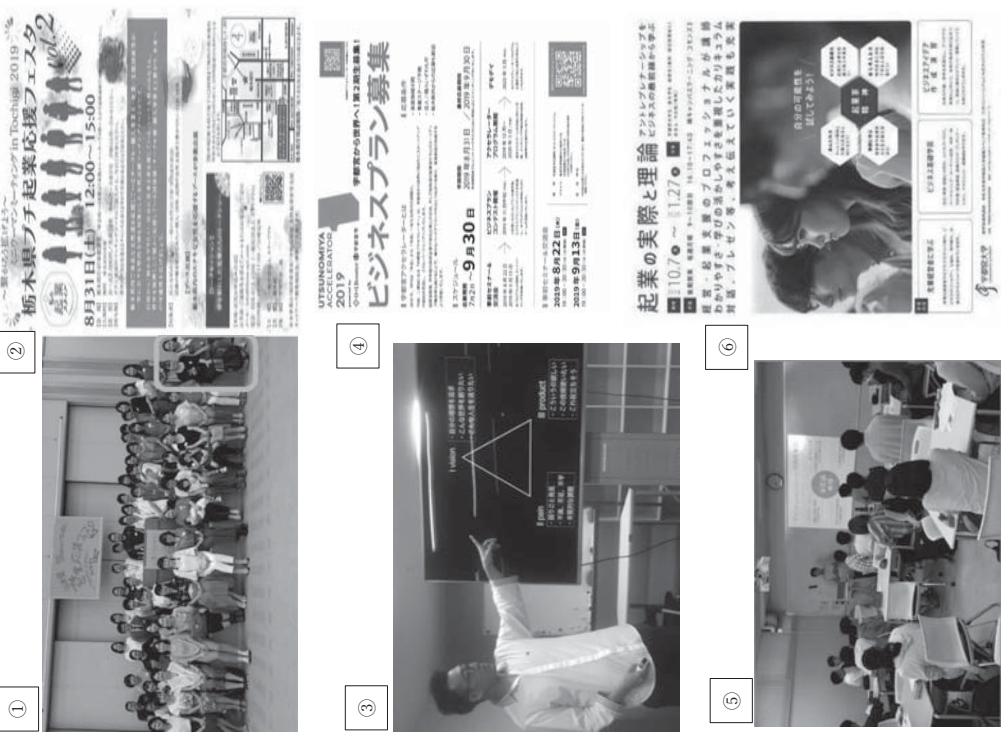
起業研究グループは、3名の起業家に起業についてのヒアリング調査を行った。セレクトショップを経営している今井氏は、起業で苦労したことについて、補助金をもらおうとしたがそのチェックに1回5万円程の費用がかかると話していた。起業支援に求めることとして、補助金をもらう際の手順と費用に問題があると話していた。起業支援に求めることとして、特定の地区で起業するならば資金2年間免除、補助金審査のハードルを低くしてほしいと意見をいただいた。（写真2-①）

サムライ寿限無を経営している江氏は、起業で苦労したことについて、外国人は日本人よりも起業のハードルが高く、特に資金面での苦労が強かったと話していた。起業支援に求めることとして、行政等公的機関がバックアップや支援をする窓口を作ってほしいとの意見をいただいた。（写真2-②）

ベトナムダイニングを営んでいるグエン氏は、起業で苦労したことについて、上記に記

したように外国人は起業のハードルが高いことを話していた。具体的に、手続きが大変で法務局に多くの書類を提出すること、保証人は日本人が2人必要で探すのが大変であった。また、補助金については条件が厳しく講習も受けなければならないと話していた。(写真2-③)

写真3 起業支援セミナー等参加



(2) 起業支援セミナー等への参加結果

1) 起業支援セミナーへの参加

上記のヒアリング調査の後、起業研究グループは8月から複数の起業支援セミナーに受講者として参加した。最初に、8月31日に行われた「栃木県ブチ起業応援フェスタ」に参加した。ここでは女性の起業支援がテーマとなっており、出展企業や来場者のほとんどが女性であった。イベントでは堅苦しい雰囲気はなく、交流会のようなものとなっており、女性ならではの和やかなムードであった。また、託児所が設置されていたり、お茶菓子も用意されていたりするなど、子供を持つ女性でも安心できる環境となっていた。(写真3-①・②)

2) ワークショップへの参加

次に、9月26日に行われた「宇都宮アクセラレータープログラム」に参加した。これは、起業のアイデアの作り方をディスカッションするというイベントであった。ここではスタートアップを応援する企業を宇都宮に呼び、ビジネスプランコンテストを開催している。しかし、応募をしなくても定期的に無料の講座を受けることができるため、明確な起業目的を持たずとも参加が可能だ。この点は宇都宮市の素晴らしい企画と感じる(写真3-③・④)

3) コンソーシアム授業への参加

10月7日から行われているコンソーシアム授業「起業の実際と論理」に参加している。この講義は、宇都宮市経済産業政策課が企画し、運営をもちぎユースサポーターズネットワークが行っている。毎週宇都宮大学で講義があり、宇都宮市の学生であれば単位を取得できる制度となっている。15回の講義の中で様々な観点から起業についてゲストが講演し、参加者もアイデアを企画して発表をする。参加者は大学生だけでなく、高校生や社会人も講義を受けていた。この点は、将来の起業の布石に役立つ注目点である。(写真3-⑤・⑥)

4) 参加結果

以上のように様々なセミナーへ参加した結果、栃木県では起業をするためのイベントが数多く開催されており、繋がりを作る機会が多いということが分かった。また、この調査で宇都宮市の起業支援体制は整っており、スタートアップしやすい環境であると感じた。また、起業家も地域の活性化のために協力してくれる人が多い、と感じた。

このように起業環境が整っている中、さらなる充実と宇都宮シリコンバレー化のために起業研究グループは何をすべきか、現状での課題は何かと考えた。

そこで、起業に興味を持つ学生が少なくないという問題に気付いた。起業にはいくつかのステップがあり、無関心期から精神養成期、起業準備期を経て起業に至る。起業に関心があったり、自分で何かを創造したいという考えがあったりする人は起業に向けての活動を始める。だが、無関心期へのきっかけ作りやアプローチが難しく、どの層でも大きな課題となっている。特に、高校生や大学生は教育機関に属しているため、民間の支援団体や行政の支援が難しいとのこと。若者向けの講座やワークショップも多く行っているが、受講生はあまり多くないとのことだった。この観点から、起業研究グループは施策事業提案として学生向けの起業啓発イベント効果の重要性に注目し、これらの企画運営しようとした。

4. 施策事業の提案

(1) 起業啓発イベントの企画運営

私たち学生による起業研究グループは、様々な起業啓発イベントを企画し、主催した。このイベントは、学生に就職か進学かの二者択一の選択肢に「起業」という選択肢を示すことを目的とした。11月17日にイロエフフィッシュで開催し、起業家2人による講演、パネルディスカッション、交流会が主な内容である。

この企画には、とちぎユースサポーターズネットワーク、宇都宮市経済産業政策課の協力があり、意見交換をしながら企画を練っていた。また、このイベントの起業支援側として、㈱グリーンデザイン代表林書織氏、㈱アグクル代表小泉泰英氏を講演者としてゲストに来て頂いた。そして、起業を目指している3人の学生にパネラーとしてゲストをお願いした。イベントには30人以上が参加した。学生の参加者が多く、中には中学生もいた。参加者の7割が20代以下であった。

1) 講演会

2人の起業家による講演会が行われ、いかにして自分が起業に至ったのか、起業のための考え方などのお話をいただいた。

林氏は大学時代の考えを始め、サラリーマン時代から起業に至るまでの失敗からの気づきといった体験談を語った。(写真4-①)

小泉氏は大学生時代に起業しており、自社製品を世界的商品にするという意気込みや自分の根幹にある体験談として高校時代の失恋経験などを語った。(写真4-②)

写真4 講演会の様子



図表3 起業啓発イベント広告

2) パネルディスカッション

次に、「宇都宮での起業」をテーマとしたパネルディスカッションが行われた。とちぎユースサポーターズネットワークの岩井氏が進行役となり、起業についての質問を6人に投げかけていくといったスタイルであった。

パネラーの学生はそれぞれ起業するという目標を持っている。作新学院大学の安野氏は、呼吸器や香りシートといった匂いに関する商品を造りたい。起業研究グループの一員である文星芸術大学の吉田氏はデザイナーをサポーターするシステムを創りたい。宇都宮北高校の山井氏は、おいしい食べ物を人を幸せにしたい、宗教上食べることができないものがある人でも楽しい食事を提供するという食に関する事業を起こしたいと、皆がそれぞれ明確な起業目標を持ったプレゼンテーションしてくれた。そのため、学生たちは積極的に起業家と市の行政の方に質問をしていた。学生が起業に関心を高めてことが感じられた。(写真5)

写真5 パネルディスカッションの様子



3) アンケート結果

イベントが始まる前と終了した後にはアンケートを実施した。事前アンケートの質問は「現在起業に興味心があるか?」、事後アンケートの質問は「起業への興味心は高まったか?」といったものだ。事前アンケートの結果は、「とてもある」または「ある」と答えた人が44.5%であった。そして、事後アンケートの結果は、「とても高まった」または「高まった」と答えた人が71.4%となり、起業への興味心が増えた参加者が26.9%増えた。

また、「今後も起業に関するイベントに参加したいか?」という質問に、4割の参加者が積極的に回答したと答えた。

以下、図表4に、起業イベントの事前と事後の興味心結果と、記述によるアンケート結果を示す。図表4の前半部は、アンケートの事前と事後の結果を数値で示してある。後半は、記述式にして、自由にコメントを頂いた内容である。

図表4 アンケート結果



5. 今後の課題および展開

本研究では、米国のシリコンバレーを目標とし、今後の宇都宮市の成長市場の創出を図り、地域活性化に繋げ、将来にわたって成長し、持続可能な宇都宮市を創生する「SDGsな未来都市うつのみや」の実現を確実にものにする提案を目指してきた。このため、良好な起業環境の実現を支援し、そのための起業に関する新たな事業を立ち上げることを提案した。

この新しく立ち上げた事業を本研究の成果とし、これを「学生アントレプレナーシップ支援制度」と名付け、この制度を将来に向けて継続的に維持活動していく、との結果を得た。この事業の活動が、日本の、そして宇都宮の学生が起業という選択版に興味関心を抱くことに寄与できれば本研究の目的は意義あるものである、と想っている。

なお、今後の課題として、この事業を持続的に活動していくことはもちろん、さらに質の高い効果的なものにし、そして広報宣伝を強化して本事業を周知させていくことが必要である。そのためには、様々なクリエイター、起業家とのネットワークを持つ民間団体、資金面や施設面での支援サポーターとしての市の行政などの協力が必要不可欠である。具体的には、事業に必要な講師の派遣料、資機材購入のための資金調達などの公的民的支援、さらにも起業マインドの普及促進講演会などへの講師の協力も要請したい。

最後に、本研究で結論として提案する「学生アントレプレナーシップ支援制度」は、起業に関心のない若者に「起業」という選択肢を示すイベントの企画運営であり、これにより起業家精神を高めていくことに大いに寄与できている。その結果、宇都宮市では、創造性あふれるアントレプレナーシップに満ちた若者が増え、さらに宇都宮に店や人が増えて宇都宮が創造都市としての活性化に繋がっていく、との期待も生まれる。そして、私たちのこの取り組みにより、宇都宮市が、経済的に活発な創造都市へと変化し、「宇都宮バレー」の実現へとつながることが強く期待できる。

【参考文献】

1. 日本：厚生労働省「雇用保険事業年報」（平成16年度ベース）
 米国：U.S. Small Business Administration 「The Small Business Economy」、英国：Office for National Statistics 「Business Demography」、ドイツ：Statistisches Bundesamt 「Unternehmensgründungen, -schließungen: Deutschland, Jahre, Rechtsform, Wirtschaftszweige」、フランス：INSEE 「Taux de création d'entreprises」

3 今後の検討課題

地域活性化研究プロジェクト班の多様なメンバーによる意見交換，さらにはまさにクリエイティブ産業である起業支援団体，クリエイター，脚本家，芸術家等からのアドバイスを受けて，大学教員の適切な指導のもと，学生たちの柔軟な発想とあいまって，研究発表会での成果発表や創造都市研究ゼミ（景観研究グループ）と宇都宮市長との意見交換など，一定の情報発信と政策提言ができたと考えている。

宇都宮市創造都市研究センターでは，創造都市研究ゼミの研究活動など，大学，行政，事業者，市民団体，学生などが連携して，引き続き宇都宮市の創造都市づくりに向けての研究活動に取り組んでいきたい。

【注】

- 1) 宇都宮市におけるクリエイティブ産業の現状と創造都市の可能性について，丹羽（2017）は，①都市計画と建築家とのコミュニケーション，そして市民とのまちづくり意識の共有，②デザインの力を社会全体で育成，発揮する環境づくり，③IT人材養成とインキュベートへの支援，④文化活動の担い手と新たなプレイヤーの参加——を挙げている。（文献[1]）
- 2) サービス業就業者数の集積度からみた都市人口や従事者数の変動について，吉田（2019）は，圧倒的に都市部に集積している「音楽家，舞台芸術家」「著述家，記者，編集者」「美術家，デザイナー，写真家，映像撮影者」などは，芸術文化のクリエイティブ産業であり，サービス経済化に伴う都市の成長要因の一つとしている。（文献[2]）

【参考文献・情報】

- [1] 丹羽孝仁（2017）「宇都宮市におけるクリエイティブ産業と創造都市の可能性」（宇都宮市，『市政研究うつのみや』，pp.61-70）
https://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/_res/projects/default_project/_page_/001/009/231/28creative.pdf
2020/3/31 アクセス
- [2] 吉田 肇（2018）「都市のサービス経済化と成長要因に関する研究」（宇都宮共和大学『宇都宮共和大学シティライフ学論叢』，pp.59-78）
- [3] 宇都宮市「大学生によるまちづくり提案発表会 2019」
<https://www.city.utsunomiya.tochigi.jp/shisei/machi/kenkyu/renkei/1022243.html>
2020/3/31 アクセス
- [4] 大学コンソーシアムとちぎ「学生&企業研究発表会（第16回）」
http://www.consortium-tochigi.jp/kenkyu_happyo.html
2020/3/31 アクセス
- [5] 宇都宮市創造都市研究センター
<https://www.rccc-utsunomiya.org/>
2020/3/31 アクセス